

白川村の「結い」と「屋根葺き替え」の変遷に関する研究

A Study on the Change of 'Yui' and 'Rethatching' of Shirakawa-mura

内海 美佳* 黒田 乃生**

Mika UCHIUMI Nobu KURODA

Abstract : In Shirakawa Village described the World Heritage site in 1995, the rethatching has been performed by reciprocal help called 'Yui' traditionally. Originally it functioned in the various collaboration of the village. From the latter half of 1950s. 'Yui' as rethatching began to decline, and from the former half of 1980s. the new position of 'Yui' that is the object to preserve appeared in Shirakawa Village studies. Through that, the diagram called 'Yui' = 'rethatching' was born. And it changed into a viewpoint that 'Yui' itself was important by described the World Heritage site in 1995. In addition, by newspaper articles and the media, 'Yui' was taken up as a symbol of Shirakawa-go, the World Heritage site after describability. 'Yui' meant not only rethatching, but also reciprocal help in the various collaboration of the village. A thing brought up by the cooperation of people and succeeded to at the present is a landscape of 'living heritage' Shirakawa Village. We do not have to mind the present meaning of 'Yui', and it is necessary to pay more attention to preservation all the things which formed the World Heritage site, Shirakawa-go.

Keywords: thatched roof, rethatching, reciprocal help, Yui

キーワード：茅葺き屋根、葺き替え、相互扶助、結い

1. 背景と目的

「白川郷・五箇山の合掌造り集落」が平成7年(1995)に世界遺産に登録されてから10年以上が過ぎ、その間、世界遺産の3集落は一気に知名度が上がり、日本国内外から多くの観光客が訪れる一大観光地となった。「世界遺産白川郷」がメディアなどで紹介される時、象徴的に使われる画像が、写真-1のような、相互扶助による屋根葺き替え「結い」の光景である¹⁾。100人を越す人たちが、急勾配の屋根に上がり、文字通り人力で、屋根を葺き替えている様子である。かつては全ての合掌造り家屋の屋根の葺き替えて「結い」が行われてきたが、現在では大半の葺き替えは業者委託で行われていて、伝統的な「結い」はイベント的に年に1回行われる程度である²⁾。



写真-1 「結い」による葺き替え

白川村では、現在、「結い」が「屋根葺き替え」に特化されて語られるようになり、地域の人は「『結い』も世界遺産の一部だから」と、その継承を使命のように感じている³⁾。では、いつから白川村において、「結い」が屋根葺き替えだけを意味し、「世界

遺産白川郷」の象徴となったのだろうか。白川村の研究史としては、大家族制の研究史や合掌造り家屋の成立過程⁴⁾、文化財としての集落景観保全についての研究はされているが⁵⁾、「結い」や「屋根葺き替え」についての研究史については、現在までほとんど焦点があてられていない。本研究では、白川村研究における「結い」について、研究史及びメディアによる位置づけの変遷を把握することによって、なぜ「結い」にこれ程までに注目が集まり、「世界遺産白川郷」の象徴になってきたのかを明らかにし、その原因について考察することを目的とする。

2. 研究の方法

本研究では、まず第3章で「結い」の本来の意味を把握した上で、第4章で白川村研究史の中での「屋根葺き替え」と「結い」の関係の変遷を、第5章で新聞記事及びテレビ放映された映像資料という、一般の目に触れるメディアの中での「結い」の扱われ方の変遷から象徴としての「結い」の誕生について明らかにする。

第4章の分析対象は、明治期から現在までの白川村に関する文献43件とする。昭和49年(1974)以前のは白川村教育委員会による荻町伝統的建造物群保存地区調査報告書(昭和50年(1975))巻末の白川村に関する資料一覧のうち現在閲覧可能なもの、それ以降のものは、国立国会図書館NDL-OPACの書誌検索及び雑誌記事索引(昭和44年-(1969-))で「白川村」及び「白川郷」をキーワードとして検索した資料の中から、「結い」または「屋根葺き替え」について言及している文献を選択し、分析対象とした。

第5章の分析対象の新聞記事は、朝日新聞「聞蔵Ⅱ」を使用して、昭和59年(1984)以前のは「白川村」で、昭和60年(1985)以降のものは「白川村」・「屋根」で検索したものの計227件を分析対象とする。また、補足として、白川村での「結い」による屋根葺き替えを紹介した映像3件を分析対象とする。

*特定非営利活動法人 茅ヶ岳歴史文化研究所 **筑波大学大学院人間総合科学研究科

3. 「結い」とは

「結い」とは、全国的に見ても屋根葺き替えに限ったことではなかった。「結い」の起源は、近世以降の、地主大農に末家や出入人の労力を結集する形のもの、小農間で行われた労力交換のもの、2つが併存していたものと考えられている⁶⁾。それが、明治30～40年代以後、自作地主が貸付地主に転換していったことにより、小農間の労力交換を特に指すようになり、近代社会では主に農業の場面で多く機能していた。こうした労働交換は沖縄では「ユイマワル」と呼ばれ、また「テマガワリ」と呼ぶ土地も多かったが、「結い」の呼称はほぼ全国に渡って行われていたとされる⁷⁾。白川村に存在する、各家の生活維持・生産支援を相互的に行う共同作業には、労働交換である「結い」の他に、一方的な労働奉仕である「コウリャク」・「テツダイ」（賃金が発生する場合有り）がある⁸⁾。それぞれの労働内容は、「結い」は、田植え・稲刈り・養蚕・材木伐採・石場カチ・屋根葺き替えなど、「コウリャク」・「テツダイ」は、石場カチ・葬式婚礼・災害時の復旧作業など、ようになる。以上のことから、「結い」は全国的に見られた労働形態の一つであり、白川村の「結い」にも様々な労働内容があり、屋根の葺き替えはその一つに過ぎないことが分かる。

4. 白川村研究にみる「屋根葺き替え」と「結い」の関係の変遷

分析対象である、明治期から現在までの白川村に関する文献の内、「屋根葺き替え」や「結い」について言及されているものは43件あった。記述の内容から、その43件を3つに区分することができた。まず、「『結い』の登場」（昭和10年代初頭～）について言及している文献が14件、次に『『結い』と『茅頼母子講』の衰退』（昭和20年代後半～）について言及している文献が12件、そして「保存対象としての『結い』」（昭和50年代後半～）について言及している文献が17件あった。

(1) 「結い」の登場（昭和10年代初頭～）

屋根について、文献の中で言及されるようになるのは、明治44年（1911）の本庄による「飛騨白川ノ大家族制」からなる⁹⁾。「飛騨白川ノ大家族制」には、葺き替え周期、屋根葺き材、屋根の厚みなどの構造について書かれているが、「屋根葺き替え」や「結い」については言及されていない。

「結い」という言葉が文献の中に見られるようになるのは、昭和11年（1936）の瀬川による「白川村のカヤダノモシ」¹⁰⁾からなる。「白川村のカヤダノモシ」には、「屋根の葺き替えにあたっては村人のユーによつて行はれる」とある。「屋根葺き替え」の方法として「結い」を紹介している文献の一方、農村建築研究会歴史部会の「飛騨白川村の民家について」¹¹⁾には、「元来、ユイと云うのは村民の相互的な無償労働提供を云うのであって、相互的といひながらその償却は未来に期せられているのである。従つてその結合の強さは村民の共同生活のあらゆる面においての支柱とされる。普請の際に見られるユイは白川村では村を分割した組によつて構成されてゐた。（中略）普請に際してユイは種々の機能を果している。石場から建前、合掌起し、やはたり（屋根葺）等は専門以外にも多くの労力の結集を必要とする」とあり、「結い」の本来の意味を把握した上で、屋根葺きもその機能の一部だということ述べている。白川村の民俗を詳細に記述した江馬も同様に、「イシバカチでも合掌起しでも、また屋根葺でも、白川村では大掛かりなモヤイ（協同労働）でもあり、ユイ（交換労働）でもあった」というように、「結い」は屋根葺きそのものではなく、その労働形態の一つとして取り上げている¹²⁾。その他、「結い」を労働形態の一つとして取り上げているものは8件^{13)～20)}、「屋根葺き替え」について述べているが、「結い」についての記述がないものが3件^{21)～23)}あった。

この時期には、「結い」は合掌造り家屋に関連する茅頼母子講やモヤイといった、様々な共同作業や労働形態の一つとして取り上げられている。具体的な「結い」の言葉が出るのは、屋根葺き替えの記述から25年後だが、これは地域で当たり前に行われていることが、当たり前前に継続されている場合、特別に意識されるものではないためであると考えられる。

(2) 「結い」と「茅頼母子講」の衰退（昭和20年代後半～）

(i) 「結い」の衰退

民俗としての「結い」に関する研究はその後長く行われていくが、昭和29年（1954）の稲垣による「山村住居の成立根拠」²⁴⁾や昭和32年（1957）の関野・伊藤による「荘白川地方の建築について」²⁵⁾では、「結い」の衰退が示唆されている。稲垣は、「相互扶助の組織としては解体の方向へ向いながら、なお転化し残存した協同組織への依存を示しているということに、かかる慣行のもつ第二義的な性格—農事慣行と比較した場合の村落構造に対する副次的性格—をみとめようと思う」とし、その「かかる慣行のもつ第二義的な性格」というのは、「かつての協同組織はその形態を維持したまま、その主目的をより公共的な村仕事に移行しつつ残存し、そして各経営体間で労力交換を目的とする場合は、それより分化して任意的結合に転化して行くという」とある。つまり、かつては「結い」が様々な機能を持つ協同組織であったが、時代の変遷により、それが農業などの私的なものより、屋根葺き替えなどのより公共的な仕事に限定的なものとなり、且つ、「結い」が絶対的なものではなく、「任意的結合」となったということである。関野・伊藤は「最近では屋根を改造して瓦又は板葺とするものが続出しているから、ユイのブロック再編成も必然であり、改築の数が更に多くなれば、ユイも行えなくなり、民家そのものは存在が崩壊する時期がくるのではなからうか」とし、「屋根葺き替え」に限定した「結い」の衰退について記述している。その他にも、「結いの衰退」について述べているものに、酒井による『飛騨の山山』などがある²⁶⁾。1950年代中頃から、文献における、「結い」に関する記述が、単なる説明から「衰退」を示唆するものになった要因は、1950年代初頭からの合掌造り家屋の急激な減少を受けてだと考えられる。ダム開発や過疎によって村内の合掌造り家屋が減少したことにより、必然的に「結い」の行われる回数も減り、且つ非合掌造り家屋の増加により、相互扶助である「結い」のシステムが崩壊していった。これらの状況が、「結い」の「衰退」を示唆する研究へと繋がったと考えられる。

また、白川村とともに世界遺産に登録された「五箇山」の旧平村についてであるが、昭和45年（1970）の岩田・安達による『合掌造り くらしと風土』²⁷⁾には、「ユイ—賃労働の変化—多くの村では現在、両者が併用されてユイ+賃労働という形をとっているが—は、ほぼ昭和五年ごろからはじまったようである」とある。五箇山では、白川村より一足早く「結い」に衰退が見られ、相互的な無償の労働奉仕であった「結い」に、賃金が発生する賃労働が加わったことを示している。このような「結い」の形態の変化について述べているものは、この時期には他には見られない。

(ii) 「茅頼母子講」

合掌造り家屋の茅葺き屋根を支えていた民俗には、「結い」以外に、「茅頼母子講」という、茅確保のための講がある。今回の資料で「茅頼母子講」について書かれているのは9件で、いずれも建築の普請に関する記述の中で説明されている。この講は、「結い」の基本単位である「組」とはまた別の単位であり、毎年刈り取った茅を一定量、同じ大字などのグループにおさめる制度のことで、講内の家で葺き替えがある場合、葺き替えをする家で足りない分の茅を、講から借りることができた。白川村では、葺き替え時には、自家で7～8割の茅を用意し、残りを「茅頼母子講」から借りていた²⁸⁾。白川村の屋根についての研究の初期には、

「結い」についての言及は見られないものの、「茅頼母子講」についての記述は、本庄の「飛騨白川ノ大家族制」²⁹⁾や川口の『飛騨の白川村』³⁰⁾などに見受けられる。しかし、その後は「茅頼母子講」についての研究はなく、再び研究の中に「茅頼母子講」が登場するのは、講が形骸化していく昭和35年(1960)前後である。王城の『日本における大家族制の研究』³¹⁾では、昭和29年(1954)に行われた葺き替えを例にとり、「屋根頼母子講という一種の貯蓄組合を設け、毎年一人ずつ信用借入をして、これを屋根修復用にあてる習慣と報告されているのである。いずれにしても建築については、共同労働その他の共同組織が重要な役割をもっていたことはたしかである」としている。この昭和29年というのは茅頼母子講が形骸化してきた時期であり、『日本における大家族制の研究』が書かれた昭和34年(1959)には、「茅頼母子講」は既に過去のものとして取り上げられている。「茅頼母子講」は現在では全く存在しないが、白川村では、「茅頼母子講」と同様の茅確保という役割を果たす合掌家屋保存組合が昭和44年(1969)に設立された³²⁾。現在茅確保は、平成15年(2003)に設立された屋根葺き専門業者「有限会社 かや屋根技術舎」によって行われるため、合掌家屋保存組合の主な業務は足場材等の調達や茅保管庫の管理等となっている³³⁾。

この時期には、合掌造り家屋の激減に伴って、村落の共同体と、屋根葺き替えという労働に深い関わりを持つ「結い」と「茅頼母子講」が共に変化し、消滅しつつあり、資料の中でもそれぞれの衰退についての記述が見られた。

(3) 保存対象としての「結い」(昭和50年代後半～)

合掌造り家屋に対して建築史研究が始まったことが契機となり、白川村内の合掌造り家屋が、昭和31年(1956)の大戸家の国指定重要文化財への指定を皮切りに、数棟が建物単体として文化財に指定されていった。

「屋根葺き替え」や「結い」に関する文献に、「保存」という視点が加わったのは、昭和58年(1983)の小鳥・義基による『飛騨百景』からである³⁴⁾。『飛騨百景』には、「合掌造りの保存のために、たとえば、いちばん金と手間のかかる合掌屋根の葺き替えには、九〇%までも補助金を出すなどその取り込みはかなり徹底している」とある。この九〇%までの補助金というのは、白川村内の荻町集落が昭和51年(1976)に選定された、重要伝統的建造物群保存地区(以下、重伝建地区)の補助金のことである。この昭和51年の重伝建地区への選定の前には、昭和44年(1969)に「合掌家屋保存組合」が、昭和46年(1971)に「白川郷荻町集落の自然環境を守る会」が発足し、村内でも特に合掌造り家屋が多く残っていた荻町集落を中心に、合掌造り家屋の保存の機運が高まっていた。しかし、このような保存の機運の中、研究において「屋根葺き替え」や「結い」について語られるのは、前述の昭和58年(1983)の小鳥・義基による『飛騨百景』が最初なのである。『飛騨百景』にはまた、「屋根の葺き替えは“結い”という相互協力で行う」と、「結い」についての記述もある。昭和59年(1984)の安藤による「白川郷の家」³⁵⁾には、「茅葺き屋根が少なくなった今も白川村の合掌造り居住者は保存組合を結成し、昔ながらの方法で互いに助けあって合掌造りを維持している」とあり、その「昔ながらの方法」について、「屋根葺きを専門とする職人は存在せず、ユイと呼ばれる村びとどおしの相互扶助で屋根が葺かれている」と説明し、「結い」が合掌造り家屋の建物の保存に付随して語られている。昭和51年の重伝建地区への選定から、白川村、特に荻町集落は保存されるべき「文化財」として捉えられるようになる。その中で、昭和50年代後半からは、合掌造り集落を支えている「結い」も保存対象として考えられるようになった。

そして、平成7年(1995)の「白川郷・五箇山の合掌造り集落」

としての世界遺産への登録を契機に、「合掌造り家屋の保存」のための「結い」というよりはむしろ、「結い」そのものが重要であるという形に変化していく。世界遺産登録の次年に発表された鈴木「白川郷・合掌集落訪問調査」には³⁶⁾、世界遺産登録が地域にプラスの効果をもたらすために克服しなくてはならない課題として、合掌造りの技術の伝承、を挙げている。具体的な動きとして、「白川郷合掌家屋保存組合は、昨年11月にカヤの葺き替え技術を若い世代に伝える講習会を初めて開いたが、これは葺き替え作業の伝統組織『結い(ゆい)』が住民間の共同体意識の希薄化にともない弱くなってきたことを受けて行われた事業である」とある。平成18年(2006)の高口・西山による「白川村荻町の伝統的景観管理とその変遷」³⁷⁾には、「昭和25年に、後の『合掌保存組合』の前身となる、茅葺きの際の足場を共有するための組織が、荻町の5戸で結成された。これを呼びかけた人物によると、いずれ『ユイ』はなくなるだろうから、足場用資材を共有し、負担を軽くしなければ合掌造家屋は残らないと思いこの組織を結成したということから、終戦直後には、すでに『ユイ』のつながりが弱まっていたことがわかる。このように組単位の『ユイ』が弱まるなか、それを補う形で合掌造家屋所有者が助け合う、先述の『合掌保存組合』が結成された」とあり、合掌造り家屋を保存するためには、屋根葺きに関わる茅確保の仕組みなどを、多少変化させてでも「結い」を守ることが必要であるとしている。

5. 象徴としての「結い」の誕生

白川村では「『結い』も世界遺産だから」という言葉を聞く。「結い」も世界遺産の価値の一部なので、継続していかなければ世界遺産の登録解除となってしまう、と危惧している人が多い。しかし、「結い」という言葉は「白川郷・五箇山の合掌造り集落」の世界遺産への推薦書³⁸⁾には載っておらず、「保全と真正性」の項目の「保全の歴史」の中で、定期的な修繕の方法について、‘in some cases by collaborative efforts by groups organized within the kumi’, つまり「組で組織されたグループの協同的努力による場合もある」とあるだけで、これが「結い」を指すと思われる。

では、どのようにして、「結い」が「世界遺産白川郷」の象徴となってきたのだろうか。一般の目に触れるメディアである、新聞記事と映像資料から把握する。

分析対象とした朝日新聞の記事、計227件の内、白川村の「屋根葺き替え」や「結い」についての記載があるものは28件だった。表-1のように、世界遺産登録の平成7年(1995)を境として、それ以前は4件、それ以後は24件、となっている。28件の内、「結い」という言葉が出てくる記事は17件あり、屋根葺き替え以外の「結い」について記載がある記事が5件であったのに対し、屋根葺き替えの「結い」について記載がある記事は14件であった。そして、100人を超す人たちが屋根に上がって葺き替え作業をしている、「結い」らしい光景の写真を掲載している記事が12件あった。逆に、第3章で述べたように、研究史の中では昭和30年前後から、「結い」の衰退について言及されてきたが、新聞記事の中では、「変化」ということも含め、衰退について記載があるものは4件に過ぎなかった。

平成19年(2007)10月30日の記事では、民宿を営んでいる合掌造り家屋の「結い」での葺き替えを紹介し、「村人たちの助け合いの精神の象徴である伝統の『結』方式で行われ、観光客らが足を止めて見入っていた」とある。「結い」は「村人たちの助け合いの精神の象徴」とされ、それが観光客への強いアピール、ひいては「世界遺産白川郷」を象徴する光景となっていることを伝えている。

続いて映像についてであるが、分析対象は、①『奥飛騨 白川

表-1 「結い」についての新聞記事

記事内容	平成6年以前	平成7年以後	総数
「結い」という言葉	2件	15件	17件
屋根葺き替え「結い」	1件	13件	14件
屋根葺き替え以外の「結い」	0件	5件	5件
「結い」らしい光景の写真	1件	11件	12件
記事総数	4件	24件	28件

郷』(昭和57年[1982])³⁹⁾ ②『飛騨白川郷 ～合掌屋根を葺く～』(昭和60年[1985])⁴⁰⁾ ③『世界遺産 白川郷 心つないだ大屋根ふき』(平成14年[2002])⁴¹⁾ の3件とする。この3件には、「結い」による屋根葺き替えの様子が収録されている。3件とも、「結い」を屋根葺き替えに限ったものではなく、「一家の大仕事には互いに人手を出し合う」、「人と人の助け合い、絆」などと表現している。しかし、性格は①・②と③で大きく違う。①・②は、材料の準備から葺き替え後の宴会まで、屋根葺き替えに係る全工程を紹介しているのに対して、唯一世界遺産登録後に作られた③では、「結い」に大きく焦点があてられている。「結い」を「失われたもの」として取り上げ、30年ぶりの村人総出の屋根葺き替えによって、その失われた「結い」を取り戻そう、というのがこのプログラムのテーマである。実際、①と②が作られた時代も、既に「結い」の衰退は明らかなものであったと考えられるが、映像からはそれは分からない。そして、③で大きく謳われているように、村人総出の葺き替えは30年ぶりであったかもしれないが、村人総出であるか、村の一部の人だけに「結い」を頼むかは、その屋根の規模による。30年間全く「結い」が行われていなかったはずはないのだが、映像では、失われた「結い」を取り戻そう、ということが盛んに謳われている。そして、「結い」が失われたのは、世界遺産登録後の村の変容が原因であり、世界遺産登録には、「人々の助け合いの心が高く評価された」とも言っている。

6. 結論

相互的共同作業の一つとして当たり前のように機能していた「結い」が、白川村研究の中における、昭和20年代後半からの屋根葺き替え「結い」の衰退、そして昭和50年代後半からの保存対象という「結い」の新たな位置づけの登場などを経る内に、「結い」＝「屋根葺き替え」という図式が生まれていった。そして、それは平成7年の世界遺産登録によって、「結い」そのものが重要であるという視点へと変化した。

また、新聞記事からは、特に世界遺産登録以降、写真と共に「結い」が「人のつながり」を象徴する伝統として取り上げられていることが明らかになった。メディアを通して、白川村を見る側には「結い」＝「屋根葺き替え」、そしてその「結い」は守らなくてはいけないもの、という印象が一般に広まり、白川村の自身の意識にも影響を与えたとも考えられる。

「結い」は、決して「屋根葺き替え」だけを指すものではなく、村内における様々な相互的共同作業を指すものであった。そのような、人々の助け合いの精神が育み、現在に継承してきたものが、「人が生活する世界遺産」である白川村の景観である。「結い」＝「屋根葺き替え」という現在の「結い」の位置づけに捉われず、「世界遺産白川郷」を形作ってきたもの全てに保存の目を向けていくことが必要であると考えられる。

補注及び引用文献

- 1) 平成18年(2006)4月筆者撮影。
- 2) 内海美佳・羽生冬佳・黒田乃生(2008):白川村萩町における茅屋根葺き替えに現状と保存に関する考察:ランドスケープ研究71(5),697-700
- 3) 1999年のアンケート調査では、「『ユイ』がなければ世界遺産でないと思っている」という回答が見られる((財)世界遺産白川郷合掌造り保存財団(2001):白川郷合掌造り集落の景観,60)。また、筆者が2006年に行ったヒアリング調査においても、「合掌持ちが助け合っていくことが、世界遺産の理由でもある訳だから」、「結いも含めての世界遺産だし、結いをやらないとお互いのつながりが薄れてしまう」という意見が聞かれた。
- 4) 合田昭二・有本信昭(2004):白川郷—世界遺産の持続的保全への道—:ナカニシヤ出版,4-8
- 5) 黒田乃生・小野良平(2003):白川村研究の系譜にみる文化財としての集落景観保全における問題点:ランドスケープ研究66(5),665-668
- 6) 有賀喜左衛門(1957):ユイの意味と其の変化:民族学研究21-4,217-224
- 7) 倉田一郎(1974):農と民俗学:岩崎美術社,72
- 8) 白川村史編さん委員会編(1998):新編 白川村史 下巻:白川村,319-321
- 9) 本庄榮治郎(1911):飛騨白川ノ大家族制:京都法学会雑誌6-3,148-149
- 10) 瀬川良三(1936):白川村のカヤダノモシ:ひだびと,553-555
- 11) 農村建築研究会歴史部会(1951):飛騨白川村の民家について:日本建築学会研究報告13,4
- 12) 江馬美枝子(1996):飛騨白川村:未来社,162-163(初出(1943):白川村の大家族:三国書房)
- 13) 橋浦泰雄(1936):白川村木谷聴書:ひだびと,525-529
- 14) 江馬美枝子(1937):白川村木谷の農家:ひだびと,81-87
- 15) 有賀喜左衛門(1938):農村社会の研究:農山漁村文化協会,203-209
- 16) 児玉幸多(1940):飛騨の白川村:史蹟名勝天然紀念物15-11,798-806
- 17) 日下隼子(1954):飛騨國白川村の大家族制について:史窓,51-56
- 18) 福島正夫(1954):山村の「家」と資本主義:東洋文化研究所紀要6,82-97
- 19) 沢本嘉郎編(1964):日本地理風俗体系 第5巻 中部地方(上):誠文堂新光社,292-295
- 20) 上杉喜寿(1986):白山:岐阜県教販株式会社,329-339
- 21) 江馬美枝子(1937):白川村木谷の民俗:ひだびと,344-352
- 22) 白木紫峰(1951):飛騨白川郷の風物:新飛騨社,50-53
- 23) 王城肇(1955):岐阜県白川村の家族集団についての調査:愛知大学法経論集13-15,247-266
- 24) 稲垣栄三(1954):山村住居の成立根拠:建築史研究(15),11-23
- 25) 関野克・伊藤延男(1957):荘白川地方の建築について:荘白川綜合学術調査報告書,115-138
- 26) 酒井昭市(1992):飛騨の山山:ナカニシヤ出版,168-170
- 27) 岩田慶治・安達浩(1970):合掌造り くらしと風土:淡交社,188-193
- 28) 白川村史編さん委員会編(1998):新編 白川村史 中巻:白川村,809-812
- 29) 前掲書8)
- 30) 川口孫治郎(1934):飛騨の白川村:住伊書店,161-167
- 31) 王城肇(1959):日本における大家族制の研究:刀江書院,67-70
- 32) 前掲書3),29
- 33) 前掲書2)
- 34) 小鳥幸男・義基憲人(1983):飛騨百景:高山市民時報社,223-225
- 35) 安藤邦廣(1984):白川郷の家:四季日本の旅 第6巻,69-71
- 36) 鈴木誠(1996):白川郷・合掌集落訪問調査:地域経済16,121-126
- 37) 高口愛・西山徳明(2006):白川村萩町の伝統的景観管理とその変遷:日本建築学会計画系論文集605,127-133
- 38) UNESCO World Heritage Centre:Advisory Body Evaluation:UNESCO World Heritage Centre ホームページ <<http://whc.unesco.org/>>,1994.10.21更新,2008.9.14参照
- 39) NHK(1982):奥飛騨白川郷 ～合掌屋根を葺く～:NHKサービスセンター
- 40) 白川村(1985):飛騨白川郷:(株)文化映画新社
- 41) NHK(2004):世界遺産白川郷 心つないだ大屋根ふき:NHKソフトウェア